

体育における平成20年度授業改善推進プランの検証

取り組みにおける成果と課題

- ・ 体力調査の結果、総合的に全国平均を下回っている。全体的に全国平均を下回っている。特に、巧緻力（反復横跳び）、持久力（20Mシャトルラン）において大きく下回っている。
- ・ 運動の日常化を昨年の課題としてあげた。しかし、体育の授業以外ではほとんど運動をしない児童がいる。（5年生）
- ・ 朝の体力持久走を行ってきた。運動を日常的に行っている児童は積極的に参加をしている。一方、運動を日常的に行わない児童において、積極的な参加が見られなかった。そういった児童に対して、意欲的な参加を呼びかける必要がある。

調査結果の分析と体育科学習との関連

内容 別 結 果 の 分 析	<ul style="list-style-type: none"> ○ 「器械運動」…約80%の児童が開脚とびで自己の能力に適した高さの跳び箱をとび越すことができる。逆上がりの習得率が4割程度にとどまっている。 ○ 「陸上運動」…50m走の結果を分析すると全国平均とほぼ同じかやや低めであった。 ○ 「水泳」…5年生の84%、6年生の88%が25m以上泳ぐことができる。 ○ 「ボール運動」…地域のスポーツクラブなど授業外での運動経験が豊富な児童と運動経験の不足がちな児童との差が大きい。
観 点 別 結 果 の 分 析	<ul style="list-style-type: none"> ○ 「関心・意欲・態度」…概ね運動への関心・意欲は高い。一方で苦手意識が拭えず、楽しさを見出せない児童もいる。 ○ 「学び方」…個人のめあてを立てることや、自分の技能については関心が高い。しかし、互いに教え合い、学び合おうとする態度にやや欠ける。 ○ 「技能」…日常の運動経験の差が顕著に表れている。体力テストの結果が上位の児童は地域のスポーツクラブに所属しているという傾向が見られる。 ○ 「保健」…日常生活におけるけがや事故、病気に対する関心は高く、健康・安全に生活しようという意識は高い。具体的な実践に結びつくようにしたい。

授業改善のポイント

教科担任制には、次のメリットがある。

- ① 用具器具の準備などに要する時間短縮を図り、十分な運動量を確保する。
- ② 指導とその評価をもとに授業改善ができる。
 1. 教科担任制のメリットを生かして指導の効果を上げる。
 2. 体育・運動能力の子どもたちのばらつきの拡大に対して。
 - i. 児童一人一人が目標をもって運動に取り組ませる。
 - ii. 児童同士の学びあいの場面を設定して協力する態度、最善を尽くして運動する態度を育てる。
 - iii. 体育に関連する図書を紹介してスポーツへの関心を高める。

【内容】

- 1 「器械運動」…逆上がりの習得率を高める。
 - (低) 器械・器具を使つての運動遊びを通して、体を動かす心地よさを感じられるような場作りの工夫をする。
 - (中) 第3学年では、鉄棒の単元で、鉄棒だけでなく、雲梯や登り棒などを使い、楽しみながら恐怖心を緩和していくことを目指す。第4学年では鉄棒を単元に組み入れ6時間の指導計画を作成。補助具の利用で恐怖心を緩和し、段階的な技の習得を目指す。中学年までに、鉄棒の逆上がりの習得率80%を目指す。
 - (高) 単元としての鉄棒指導に限らず、鉄棒に触れる機会を多くする。
- 2 「ボール運動」…技能差が広がりつつある実態に対応して次のことに取り組む。
 - (低) 自分の身体や動きを思う存分使う機会を多く作る。また、ゲームの仕方や規則の理解、ルールへの遵守、勝敗をめぐつての正しい態度などゲームにおける社会的態度を身に付けさせるようにする。そのために、視覚的な教材を用意する。技能、態度を養えるような遊びを多く取り入れる。
 - (中) 第3学年ラインサッカーの単元では、9時間扱いの指導計画を立て、前半5時間を「つかむ」後半4時間を「取り組む」と段階に分けた指導を通し、「つかむ」では、一人一人が目当てをもって得意な技能を伸ばすことに指導の重点を置き、「取り組む」では、「つかむ」で伸ばすことの出来た技能を活用できるよう、チームわけや、ポジショニング等の工夫をし、全員が活躍できる場を設けるようにする。第4学年のバスケットボール型ゲームの単元では9時間の学習計画を立て、全員が楽しむという視点から、能力差をうめる特別ルールを設ける。チームのよさを生かすための作戦を考え、一人一人が目当てをもって取り組むようにする
 - (高) チーム分けの工夫。男女差、能力差をうめる特別ルールの採用。学び合う時間の設定。恐怖心を取り除く教具（ボールの空気圧など）の工夫。児童一人一人に目標をもたせる。
- 3 「水泳」…4年生までに大田区水泳技能検定4級（平泳ぎ、クロールを25M以上泳げる。）以上の児童を80%以上を目指す。
 - (低) 水への抵抗感、恐怖心をもつ子どもが多く目立つ。そのため、子どもが楽しいと思えるように、「水遊び」の工夫をする。導入の時間に、まねっこ遊び、じゃんけん遊び、鬼遊びなどを多く取り入れる。また、夏季水泳教室への参加率を高め、水に触れる機会を多くもたせるようにする。
 - (中) 本校の調査により、中学年において7級（平泳ぎの蛙足ができる。）を合格できることが水泳技能の習得のポイントになっていることがわかっている授業時間内の級別指導の時間の充実のために、すでに蛙足を習得している児童がまだ、習得していない児童に教える場面を作っていきたい。また、夏季水泳教室の参加率が上がるように呼びかけていく。

(高) 教師による指導だけでなく、すでに泳げる児童が平泳ぎの蛙足ができるように教え、子ども同士の学びあいができるようにしていく。また、授業時間内における級別指導の充実を図り、子どもの技能差に応じられる指導体制を充実させる。

4 その他

① 一輪車、竹馬の活用の充実

運動集会委員の児童が全校児童向けの竹馬、一輪車の上達を目指した学習カードを作成し、日常の遊びとして定着させる。

② スポーツ関連の図書を活用し、読書活動を進める。

スポーツの歴史、ルールなど文化的な側面を触れさせることでいっそう関心をもたせたい。

③ 体育用具・器具の整理

校庭・体育館の器具庫の使い勝手が悪く、用具の準備など授業のマネジメントに時間がかかっていた。結果、運動量の低下を招いていた。器具庫の整理をすることで、運動量の増加を目指す。

【観点別】

- 1 「関心・意欲・態度」…苦手意識が拭えず、楽しさを見出せない児童への対応として次のことに取り組む。
 - (低) 子どもが意欲・関心をもてるような遊びをどの單元においても行う。その中で、仲間への関わりの意識をもたせ、社会的態度を身に付けさせる。
 - (中) 「できない」や「痛い」「怖い」が児童の関心・意欲に関わっている。細かいステップに分けて技の練習を進めたり、補助具を工夫することでこれらの不安を軽減させ、関心・意欲を引き出す。
 - (高) 場の設定の工夫。技能に応じた練習の場。チームの一員としての役割をもたせる。励ましの言葉が飛び交うような雰囲気づくり。
 - (全) 体育の学習内容に関連する図書を紹介してスポーツへの関心を高める。
- 2 「学び方」…互いに教え合い、学び合おうとする態度を育てるために
 - (低) 基本の運動としての易しい運動遊びが楽しくでき、簡単なルールを考えていっそう楽しめるようにする。
 - (中) 単元に合わせたグループ分けをする。うまく協力できているグループがあれば、全体の場で取り上げ、互いに協力し、学び合って学習をすすめるためにはどうすればよいか、見通しを持たせる。
 - (高) みんなで向上の喜びを共有することができる学習過程を組む。記録などの伸びが実感できるような学習カードを作成し活用する。
- 3 「技能」…運動経験の差が大きく影響している実態に対応して、次のことに取り組む。
 - (低) 技能差に関係なく、誰もが楽しめる活動、競争の工夫をする。その中で、基本の運動としてのいろいろな運動遊びを楽しく行うための基本的な動きや各種の運動の基礎となる動きを身に付けさせる。
 - (中) 学習カードを使って個々の能力に合わせた目標を設定し、それを達成することによる楽しさや満足感を味わえるようにするとともに、学習による努力や成果を評価する。
 - (高) 技能の高い一部の児童が活躍して終わることなく、みんなで楽しめるようなルールづくりなどを工夫して、運動の苦手な児童もできるだけ運動に親しむことができるようにする。